

女性の生涯発達研究における エンパワーメント概念の可能性

吉 田 由 似

1. はじめに

現代女性の生き方は、かつての固定的で画一的な生き方に比べ、多様化し、主体的に一人の人間として自分の生き方を選びとる可能性が広がったかのように見える。しかしながら、その多様な生き方すべてが社会から許容されている訳ではない。そうした社会からの許容を得られない女性たちのライフコース選択（例えば、未婚・非婚などシングルであることや、出産しないあるいは婚外子出産であることなど）の背後には、様々な問題があるといえる。とはいえ、彼女たちはそうした様々な困難や葛藤を経験しながらも自らの人生を、主体的に選択し生きようとする。

そこで、本研究では現代女性、とくに伝統的な価値や生き方を否定し、これまでとは別な生き方を模索しながら、社会的抑圧や差別に対して格闘している女性に特徴的な生涯発達過程の様相を捉え、そうした女性の発達にかかわる諸問題について理解し説明するのに、エンパワーメント概念を活用することの可能性を検討したい。以下では、まず従来の女性の発達・生涯発達研究についてのレビューを行い、そこでの問題点を指摘する。次に、女性のエンパワーメント概念の整理を行った上で、女性の生涯発達の検討に用いるエンパワーメントの分析枠組みや視点の提示を行いたい。最後に、それぞれの視点や枠組みを用いて、女性の生涯発達研究を検討することへの有効性について考察を加えたい。

2. 従来の女性の発達・生涯発達研究

2-1. 伝統的な発達研究

まず、生涯発達について、これまでどのような研究がされてきたのか概観することから始めたい。従来の発達・生涯発達研究は人間の発達的変化に対して多くの問題提起や貢献をなしてきた。しかしながらその一方で研究の進展に伴い、以下のような様々な批判や課題に直面することとなった。

現代の発達研究の発展に対して極めて大きな貢献をなしてきたとされる理論家の多くは、発達段階説に立っている（浜崎・田村2011：10）。なかでも、ライフサイクル研究に大きく貢献し、アイデンティティ理論の提唱者でもあるエリクソン（Erikson, E.）のパーソナリティの発達段階論、コールバーグ（Kohlberg, L.）の道徳性の発達段階論、ハヴィガースト（Havighurst, R. J.）の発達課題論、レヴィンソン（Levinson, D.J.）の成人期の発達段階論などが挙げられる。これらの段階的アプローチによれば、あらゆる人間は質的に異なる各段階を連続的に決まった順序を経ながら発達するという普遍的な発達段階の存在が主張される（村田1989：23-24）。しかし、現代のように価値観や生き方が多様化してきた人々の生涯の発達過程は、年齢を基に区分されたこの画一的な段階モデルには当てはまらなくなっている（難波2000：165）。また「不連続な発達をとげる個人は例外視され、無視されることになる」（天野1990：12）という排他的な視点の存在が目される。このような視点はハヴィガーストの発達

課題論にも見られる。彼の発達課題は生涯にわたって提示され、社会的要請が強く反映された課題内容であり、それを達成できなければ、その人には社会的不適応が生じると考えられた(村田1989:38)。こうした彼の発達課題論は人々の多様な生き方を許容せず、差別的に機能する危険性があるとされる(赤尾1998、2004)。

さてそんななか、近年、生涯発達研究において、画一的な人生パターンに焦点を当ててきたライフサイクル研究から、個々人の多様な人生パターンに焦点を当てたライフコース研究への移行が生じる(赤尾2004:117)。以下では、生涯発達研究において活用されることとなったライフコース論について見ていきたい。

2-2. 生涯発達研究におけるライフコース論の導入

日本で本格的にライフコース研究が始まったのは1980年代になってからであるが、生涯発達研究の新たな分析視点として、ライフコース論が導入された背景には、次のような点が挙げられる。第1に、人間の発達が受胎から死に至る一生涯にわたる過程であることについての認識の確立、第2に、人生の特定段階の理解にあたって、それを個々人の内面の発達の变化の文脈だけでなく、歴史的・文化的な文脈において把握する必要性があるとする認識の定着と、そうした認識に立って、実証的研究を進める手段としてのコーホート法の開発がなされたこと、第3に、人々の価値観や生き方が多様化してきたなかで、普遍的な発達モデルを前提とする従来のライフサイクル論の研究視覚の限界性、の3点である(森岡1986、天野1990)。

ライフサイクル研究も加齢に即して生涯にわたる発達の变化を追跡する視点に立脚する点でライフコース研究と共通するが、個人や家族の内面の変化に注目して、歴史的出来事など外部で起きた変化の影響を無視する傾向があった

(森岡1996:6)。とはいえ、従来のライフサイクル論の視点は、かつての日本社会における人々の発達の变化を捉える上で有用であった。

さてここで、ライフコース(life course)とは何かについて明示しておく必要がある。ライフコースとは年齢によって区分された生涯を通じての経路であり、人生上の出来事の時機(timing)と、ある出来事から次の出来事への移行を表す期間(duration)、特定の出来事の時間的な長さを表す間隔(spacing)、およびそれぞれの出来事の順序(order)に見られる社会的パターンを意味する(エルダー1978、2003、嶋崎2008等)。しかし、大久保(1990)は、このエルダーによる定義は、ライフコースそのものの定義ではなく、ライフコースパターンについての定義であると解釈すべきだと指摘する。そこで、ライフコースは、社会・文化的に規定(制度化)されつつ、年齢規範・性別に伴うべき出来事(出生・入学・卒業・就職・結婚・子の出生・昇進・転職・離婚・死別・定年など)と、それに伴う社会的役割の遂行(役割の取得・保持・離脱の時系列的な移行過程)と、その役割遂行の連鎖を種類に応じて複数のキャリア(家族経歴・教育経歴・職業経歴など)に分類して、相互に関連する複数のキャリアの束の展開過程として捉えることができる(大久保1990:56、長谷川他2007:362)。

ライフコース研究は、大きく2つの視点に分けることができる。一方で、社会変動と個人のライフコースの関係に焦点を置き、個々人のライフコースに対して社会変動や歴史的出来事の影響を検討しようとする。例えば、経済不況が人生上の出来事(結婚や出産、就学や就職)の時機をずらしたり、それぞれの出来事の順序を入れ替えたりしてライフコースに影響を及ぼしていることを明らかにする(長谷川他2007:362、岩井2006:14)。もう一方で、対人関係と個人のライフコースの関係に焦点を置く。個人

のライフコースはさまざまな人々、とりわけ人生行路に転機が訪れた際に進むべき道（生き方の指針）を導いたり、また人生観に影響を与えたりする家族・配偶者・親族・友人・同僚などの「同行集団（convoy）」との対人関係によって形成されていく。同行集団は「そうした外的な志向性と内的な志向性との橋渡しをする機能」を担っている（嶋崎2008：60）。そのようなライフコース観のもとでは、個々人は、社会・文化的に規定された人生行路を参考にしながら、その一方で自分の行路を決めていこうとする「持続的自己イメージ」を持ち続け、ライフコースを辿ろうとする（長谷川他2007：362-363）。

以上のように、ライフコース研究は、社会のなかで個人が発達的に変化していく過程、さらには、個人の生き方が社会構造を進展させる過程、その両者を観察しようとする（嶋崎2008：10）。しかし、ライフコース研究の主要な関心は、人々のライフコースに対するマクロな社会変動や社会文化的文脈の影響を問うことにある（岩井2006：14）。そのため、ライフコース研究のほとんどが、ライフコースの変化の説明に、マクロ水準における社会・文化的、経済的な要因によるものにとどまっている。また、研究者の関心の問題だけでなく、人々が社会をいかに変え得るかという歴史や社会への影響力という課題は理論的には成り立つものの検証し難いとして取り上げられにくい（エルダー2003）。

2-3. 「女性の視点」が導入された女性の生涯発達研究

さて次に、女性の生涯発達研究に焦点を当てて、フェミニズムやジェンダーの視点からの従来の生涯発達研究への再検討を迫る動きについて概観したい。

従来の発達理論は男性研究者の手によるものであり、男性のみを対象として導き出されたも

のであった。にもかかわらず、女性の発達といえば、男性のみの資料から提起された発達段階理論に準じるものとされてきた（難波2000：165）。これにより研究の問いの立て方、研究データの解釈や理論化の際に偏りや歪みが生じた。柏木と高橋はフェミニズムの視点から、従来の発達研究者らが発達の達成として見なしていたのは近代産業社会の存続を可能とする家父長制的価値を常識として受け入れること、そしてそれを実現する性別役割分業や性差の獲得を発達だと見なしていると指摘する（柏木・高橋1995：6-7）。こうした価値の偏向を指摘し、女性には女性特有の発達があることを実証し、女性についての発達理論が必要であることを論じたのがギリガン（Gilligan, C.）である。ギリガン（1986）は、従来の発達理論に基づいて女性の発達を調べると矛盾が生じるのは、女性の発達に問題や欠陥があるのではなく、理論そのものに欠陥があることを指摘した。彼女は、従来の人間一般とされてきた発達段階理論、例えばエリクソンの自我発達論やコールバーグの道徳性発達論は少しも一般的ではなく、男性社会の価値が反映されているにすぎず、男性中心的な偏向の存在を明らかにした（柏木・高橋1995：7、竹家2006：73）。こうしたギリガンの女性の視点に立った女性の発達理論を創る必要性を説いて以来、女性に見られる発達の特質に関心が高まり注目されるようになった（竹家2006：73）。

竹家（2006）によれば、日本における女性の生涯発達研究もギリガンを始めとするアメリカの女性の生涯発達研究に強い影響を受けているという。ギリガンらのアイデンティティの形成・発達の様相における男女の差異について、「男性は分離志向が強いのに対し、女性は関係性への志向が強い」、という主張を追試する実証的・理論的研究が数多く見られ、他者との関係性とアイデンティティの発達について考察を

深めている（岡本1999、難波2000、宇都宮2008等）。また、女性に特徴的な多重役割がもたらすアイデンティティの葛藤と統合などに焦点を当てた研究が多くを占めている（竹家2006：78）。このように女性の生涯発達研究では、伝統的な男性中心の発達理論およびモデルへの再考を迫るものが多数見られる。本研究においても、現在の多様な生き方に伴う女性特有の発達の問題を解明していくためにも、女性の視点およびフェミニズムの視点に立った女性の生涯発達に関する明確な理論やモデルの提示が必要であると思われる。

2-4. 女性の生涯発達研究の問題点

しかしながら、女性の生涯発達研究がこのように進んでいるとはいえ、これらの先行研究には対象者の代表性や年齢、発達段階に偏りが見られる（船越2011）。以下、その問題点を指摘する。

第1に、女性の生き方が多様化してきたことに伴い発達の様相も異なることが指摘されつつも、先行研究で検討されるのは、結婚・出産・子育てなどに伴う女性特有の発達過程であり、その多様性の中にも見られる共通性に焦点が当てられている。そのため個々人に異なる発達過程の様相が看過されている。さらに言えば、対象者の偏りの問題から未婚・非婚女性などのシングル女性についてはあまり注目されていない（同上、宇都宮2008）。第2に、従来の研究は身体的・心理的側面といった個人の心理的な内面領域のみに焦点が当てられ、社会・経済・政治的側面などがほとんど含まれていない。生涯にわたって発達の变化が生じるとされる様々な側面とそれら諸側面の関係性を含めて1つの研究として見る必要がある。第3に、伝統的な年齢規範に従い区分された発達段階論が用いられることも少なくない点である。しかし、先述したように「各段階の連続性が当然視されることか

ら、不連続な発達をとげる個人は例外視され、無視されることになる」（天野1990：12）という問題を含んでいる。第4に、女性を対象とした発達研究は成人期・中年期といった特定の期間や段階を対象としたものが多く、他の期間に焦点を当てた研究が十分には検討されていない。そのため人間の発達における過去の経験や出来事といった重層的な関係性が内包している複雑性を捉えきれていない。また、個人の発達の变化を社会歴史的な文脈に位置づけて考察する必要性も指摘される。そして、最後に発達理論には所与の社会・文化的条件に適応していく局面だけでなく、女性自らが既存の社会・文化的条件のあり方に抵抗し、つくりかえていこうとするもう一つの局面から考察する必要があることの問題が推察される。また、岡本(1999)が指摘しているように、女性の生涯発達に関する研究自体がそれほど多くないことから、今後の発展が求められる。

以上を踏まえて、女性の生涯発達研究を進展させるうえで有効だと思われるのが、「エンパワメント」概念である。

3. 「女性のエンパワメント」の概念整理

そもそも、エンパワメント概念とはどのような用語であるか、また女性を対象にした場合、この概念はどのような意味をもって用いられるのか整理することから始めたい。

「エンパワメント (em-power-ment)」の語源的な意味は、力を意味するパワー「power」に、「内」や「…にする」あるいは「…に与える」という意味の動詞を作る接頭語 (b, p, m, ph で始まる語で使われる時の「en-」の変形)「em-」と、名詞をつくる「-ment」という接尾語がついた英語である。一般に、エンパワメントとは、何らかの要因によってパワーを奪われた人々が、適宜、他者による何らかの働きかけを

受け、個人の身体的・心理的な側面のみならず、連帯し集団となって社会、経済、政治的な側面までも含めたパワーを主体的に獲得していくプロセスであり、最終的には平等で公正な社会の実現に向けて社会変革が生じること、と定義づけられる（フリードマン1995、久木田1998、佐藤2005a、2005b等）。

本研究では、女性のエンパワーメントに焦点を当てて考察するものであるから、先述した一般的な定義を、次のような視点からとらえ直す必要がある。久木田によると、1995年北京で開催された第4回女性会議で決定された行動綱領は、「女性のエンパワーメントに関する世界的な合意を表したもので、今日的なエンパワーメントの意味を整理し理解する上で重要な文書である」とされる。この行動綱領のなかで、女性のエンパワーメントには経済的、社会的、文化的、政治的など公的および私的生活のすべての分野への意思決定と積極的な参加（participation）、家庭や職場および国家・国際社会における権力（power）および責任の平等な分担（share）、平等に基づき女性と男性が互いに変容したパートナーシップの関係性を築くことなどが必要だとされている。また、女性と男性の平等が普遍的な人権の問題であることと、人間中心の持続可能な発展の条件であると記されている（久木田1998：12）。

女性の場合、社会的な差別の構造のなかでパワーを発揮できず奪われてしまうことが多い（同上：11）。そのため女性のエンパワーメントには、「社会的に作られたジェンダー役割や性別分業モデルによる抑圧からの解放という固有の課題を念頭にいったエンパワーメントプロセスが提唱される」こととなる（井上2012：4）。しかしここで、現代のように生き方が多様化してきた女性たちにとって、女性たちの抑圧経験を従来のように男性との関係上の問題としてだけ見るのではなく、女性間の差異、つまり女性

一人一人に特有の抑圧・差別的経験や葛藤が見られることを視野に入れる必要があるのではないかと問が生じるであろう。しかし、女性間の差異や葛藤には、男女格差あるいは女性差別、つまり市場労働と家事労働をめぐる男女間の非対称性・性差の問題が根底にあるということから、男女間の関係性の変革は強調されたい（橘木2008）。また、「現実の制度、規範、慣習において『女であること／男であること』に基づいた差別や制約、処遇の違いや不当な権力行使があることを問題視するためには、モダンなレベルでの、つまり男女間の格差や性差に着目した課題設定も依然有効と言える」（中西・堀1997：90）。そこで本研究では、女性のエンパワーメントを、社会の抑圧・差別的な構造によって、パワーを奪われている女性が、適宜、他者による何らかの働きかけを受け、女性自らが問題を自覚し、身体的・心理的・社会的・経済的・政治的パワーを獲得していくプロセスであり、究極的には女性の地位向上にむけて、平等で公正な男女間の社会関係性や構造の変革が生じること、と定義する。

さらに、ここで女性のエンパワーメントの様々な側面および社会関係の変革の特性について、久木田の定義に依拠しながら説明する。「身体的側面のエンパワーメント」とは、女性が日常生活での健康や栄養などの基本的ニーズを満たすことを指す。「心理的側面のエンパワーメント」は、女性個人の心理的な変化を意味し、自信、自尊心、やる気、判断力、計画策定能力をつけるなどの認知的、知的、情動的な側面を指す。「社会的側面のエンパワーメント」とは、二者間関係、家庭やコミュニティ、組織での意思決定にも参加し、社会的地位を得ることや、対人関係や集団間関係において意見表明・交換をすること。また、女性が組織化され活動に参加するようになり、その参加によってリソース（時間、技能、知識や情報、物理的資源など）

の共有や集積、それから得られるパワーの集結を可能にすることを指す。「経済的側面のエンパワーメント」には、女性個人の収入や消費(購買力)の増加、物やサービスの利用が可能となり生活の改善が見られるようになることを指す。「政治的側面のエンパワーメント」とは、意識化された価値や目標の実現に向けて行動がとられることや、女性の組織化や集団行動(政治的活動)によって政治的な発言力を強めていくことを指し、さらに集団外の人々にも社会参加・参画を促していくようになる(久木田1998:25-31)。最後に、「社会関係と構造の変革」とは、これまでパワーを持たなかった弱者(ここでは女性)が全てのパワーを獲得し、これまでパワーを持っていた社会的強者(ここでは男性)をも含めた社会の関係性や構造に変化(相互変容)が生じることを意味している。このような変化は、社会的、経済的、政治的、心理的、価値的な変化を伴うもので、構造的で質的な変化といえる(同上:188)。

4. 女性の生涯発達過程の検討に用いるエンパワーメントの分析枠組みおよび視点

4-1. 個人単位での分析

次に、女性の生涯発達のプロセスに対して、エンパワーメント概念を用いながら分析するため枠組みや視点を提示したい。

第1に、力をつける主体・行為の主体、いわば発達の主体は個人自身であることを基本として、個人単位での分析視点をを用いる。

エンパワーメントは、基本的には「個人」とその集合体である「集団」の2つのレベルに分類して考えることができる(同上:25)。集団の捉え方は分野によって様々であるが、女性のエンパワーメントを考える場合、個人としての女性と女性の組織または女性という集団(実際の・個別的な活動グループ)、あるいはより広

い女性というカテゴリーとして捉える(伊藤2002、目黒1998、原1999、蜂須賀2005、池松2009等)。個人としてのエンパワーメントは、特定の女性をもつ潜在能力が引き出されて、自律した主体としての自信や自尊心、肯定的な自己概念を獲得し、個人的な生活に対して意思決定をして選択の幅を広げていくことを意味する。これに対して、集団としてのエンパワーメントは社会運動のような組織体による集合的な方法や行為を通じて社会的・経済的・政治的資源を獲得し、エンパワーメントを実現するものである(伊藤2002:243、久木田1998:25、中村2004)。「通常、集合的エンパワーメントにおける社会運動は、社会的に規定されたジェンダー役割や性別分業モデルそのものの改変を目指している」(井上2012:4)。

しかし、伊藤も指摘するように「そうした社会運動は個人の水準における戦略的ジェンダー関心に支えられて展開されるのが普通である」(伊藤2002:244)。また、個人レベルで生じたエンパワーメントが集団(組織)のエンパワーメントにつながり、組織がある程度活性化されれば、その中に参加している個人のエンパワーメントがより促進されるという双方向のエンパワーメントが生じる可能性もあると考えられる(中村2004:11)。つまり、個人のエンパワーメントと集団としてのエンパワーメントの間には相互作用が見られ、2つのレベルを単純に切り離すことは困難である(池松2009:4-5)。このように個人のエンパワーメントと集団としてのエンパワーメントは相互に補完しあいながら成し遂げられる場合もあり得る(蜂須賀2005:33)。

しかしながら、現実には個人がエンパワーメントしても、そのパワーは組織のエンパワーメントにつながらないことが多いとされる(中村2004:10)。原が指摘するように、組織の中で行動していても、そのメンバーである一部の個

人、あるいはすべての個人が同じようにエンパワメントしているか否かは定かではない。そのため組織ないしは集団のみでなく、個人単位での分析をすべきである（原1999：96-97、102）。また目黒は、エンパワメント・プロセスは女性たちが置かれた状況の認識から始まるのであり、その認識の主体は女性個人であること、さらに、その状況を連帯し集団で変えていくにしても行為の主体・連帯してパワーをつける主体は女性個人であることから、エンパワメントを分析レベルで個人単位で捉えることが含まれるという（目黒1998：36）。以上を踏まえて、女性個人の生涯発達のプロセスを分析する際に、個人と集団（家族や仲間集団、組織）との関係性について視野に入れつつも、個人レベルでも集団レベルでもパワーをつける主体、換言すれば発達の主体は個人であることを基本として、個人単位で分析する。

4-2. ミクロレベルとマクロレベルの視点 — 身体・心理・社会・経済・政治的側面への着目

第2に、女性が生涯にわたって獲得しようとするパワーとは個人の身体・心理的側面だけでなく、社会的、経済的、政治的な側面も関連しており、最終的には社会変革を目指すという多層構造を成していることから、女性の発達の分析の際には、それら諸側面に焦点を当てて分析する。

「エンパワメント」という用語が使用されている分野は幅広く、なかでも男女の性差、特に女性への差別など女性問題に関する文脈でこの用語を用いているのは、ジェンダーや女性と開発、教育の分野などである。これらの分野で用いられるエンパワメントについて概観してみると、対象が社会的に差別や抑圧（搾取）されパワーを奪われた人々（ここでは女性）であるという点や、個人のパワーを向上させなが

ら、最終的には社会全体の変革へつなげるという点が共通しているといえる（池松2009：5、久木田1998：6等）。しかし、エンパワメント概念の歴史的展開を見ると、ジェンダーと開発の分野では、「ジェンダー関係に影響を与える」ことで社会変革を目指すという点が特徴的で、パワーに関連した政治的な概念であるとともに、パワーの再配分の過程に注目した関係性を示す概念として現在でも論じられているのに対して、教育の分野では、「個人のモチベーションの向上やアイデンティティの育成といった内面的な文脈のなかで捉える概念となり、政治的・社会変革の要素が薄れている」（鈴木2010：5-6）といわれる。当初、成人学習・生涯学習は社会変革のための平和的手段とされ、その中ではラディカルな立場でエンパワメント概念が用いられていたが、心理学の領域で「内発的動機づけ」の理論化が進むと状況は一転し、政治的な側面よりも内面的な側面に重きがおかれるようになったと指摘される。そのためこの分野では、個人的・心理的側面が重視され、社会的・政治的・運動的な側面が脱文脈化され、個人の内面的な変革という意味合いで扱われるようになったといわれる（同上：4-6、松本2005：90-99）。

女性のエンパワメントを可能にするキーワードは「教育」と言われるほど（石田他2005：156）、女性のエンパワメント研究は教育機関を活用した学習場面で取り上げられることが多い。そこでは女性のエンパワメントを促進するための学習のあり方や支援者側の取り組み方に向けた研究報告が数多く見られ、エンパワメントの実現に向けた豊かな価値ある知見を私たちに与えてくれる。しかし、エンパワメントが個人的な内面性の変化を求める概念として説明できるならば、わざわざ「エンパワメント」という用語を使わなくとも、自己効力感、自己有能感、内的制御感などという心理学の概

念を用いればよいことである（中村2004：19）。近年、女性のエンパワーメントをめざす学習で自己決定学習と意識変容の学習が重視されていることに注目し、エンパワーメントを社会的・政治的構造に位置付けて、女性のエンパワーメントをめざす学習の課題を明らかにするとともに、政治的側面を評価し直す研究もされている（松本2005）。

以上、これらの分野におけるエンパワーメントの用いられ方を踏まえて、女性は社会的に抑圧や差別を受けてパワーの欠如状態にある、あるいはパワーを持たない社会的地位にあるという前提にたっており、そこに奪われた力を取り戻すという含意がある（目黒1998：36、池松2009：4）。そこで単に個人を励まし頑張らせたところで、問題は個人のものとして収斂されてしまい根本的な問題解決には至らない。そのため、女性のエンパワーメント研究は、女性たちがどのようにして力を十分に発揮できない状況に追いやられてしまったのかという非力化のプロセスやメカニズムを解明しなければならない。そして、結果よりもパワーを付ける過程が重要であるため、女性たちが自身の抱える問題を改善するために様々なパワー——心理的、社会的、政治的、経済的なパワー——を獲得し向上させながら、最終的には平等で公正な社会の実現を目指して社会構造を変えていくプロセスまで見ていかなければならない（フリードマン1995、佐藤2005a、久保田2005：29-30等）。ただし、女性のエンパワーメントは「個人の意志や自己の潜在力への気づき、自信の形成などがあってはじめておきる、極めて心理的な側面のつよいプロセス」（久木田1998：28）であるということは留意しておく必要がある。したがって、女性の生涯発達過程においても、個人の心理的な内面領域や対人関係による発達の变化を中核に、ミクロレベルから、組織、文化、社会、政治、経済といったマクロレベルまでも視野に

入れる必要がある（久保田2005：29-30、鈴木2010：4）。それゆえ、女性の生涯発達の分析では、身体的・心理的・社会的・経済的・政治的側面に分類して、それぞれに焦点を当てて分析する。

4-3. ロングウェの「女性のエンパワーメント・フレームワーク」の活用

第3に、ロングウェ（Longwe, S.）の「女性のエンパワーメント・フレームワークの5つのレベル」を、女性の生涯発達のプロセスの構成要素として用いる。

このフレームワークは、発展途上国、特にアフリカの文化社会を念頭に編み出されたものであるが（Longwe2002：1）、ジェンダーと開発の分野、ソーシャルワークの分野、コミュニティ心理学、健康教育など様々な分野でエンパワーメントのプロセスが論じられる際に鍵概念となっている「パワー、資源、アクセス、コントロール、参加、受益（対象）者、担い手など」いくつかの共通の用語が含まれており、日本をはじめどの世界でもエンパワーメントを分析する際に利用できる枠組みであると考えられる（久保田2005：32、モーザ1996、久木田1998：21、中村2004：7）。

ロングウェの女性のエンパワーメント・フレームワークとは、「福祉（Welfare）、アクセス（Access）、意識化（Conscientisation）、結集（Mobilization）、コントロール（Control）」という5つのレベルから構成されている。①「福祉レベル」とは、開発介入が男女格差を最低限ここまで縮めたいと望むレベルとして定義づけられる。ここでいう福祉は栄養状態の改善、保護施設、収入などといった社会経済的な地位の向上という意味をもつ。もし、介入がこのレベルで終わってしまうと、女性は上から「与えられる」援助の受動的な受取人という立場にとどまってしまうので、このレベルはエンパワー

メントのゼロ・レベルとされる。②「アクセスレベル」とは、エンパワーメントの最初のレベルとして定義づけられる。女性は、水、土地、市場、技能訓練、情報や知識といった資源へのアクセス（資源を入手・利用する機会）の増大から生じる女性自らの労働や組織化によって、男性に対して自らの地位を向上させると考えられる。もし、女性たちが自らのアクセスを増大させたのならば、これは、意識化のプロセス、すなわち、女性たちが自らの問題を認識し分析して、それらを解決するための行動を起こすことの始まりを示唆する。③「意識化レベル」とは、女性の資源へのアクセス、地位や福祉が男性に比べて不平等に扱われているのは、自分たちの能力や努力の欠如、組織の問題のせいではないということに気付くプロセスとして定義づけられる。それらの問題は、実際には、男性に優先的にアクセスやコントロールの権限を与える差別的な慣習や規範（構造）に起因すること、女性自身が家父長制の規範を受け入れ支持するような役割を担っていることもあるということの認識（気づき）を含んでいる。意識化は、資源への女性のアクセスを妨げる差別的な慣習の1つあるいはそれ以上を取り除くための行動を集団的に推し進めることにも関わっている。したがって、④「結集レベル」とは、意識化を補完する行動のレベルである。このレベルは、女性が自らの問題とその根本的な原因を認識して分析し、差別的な慣習を克服するための戦略を確認して、そうした慣習を取り除くための集団的行動を（社会的活動に参加）するために集結することを含んでいる。⑤「コントロールレベル」とは、資源へのアクセスに関して男女が平等に意思決定できるようになり、その結果、女性が資源へのアクセスに対して直接コントロールを成し遂げられるようになったときに達せられるレベルである。女性たちは、もはや男性の裁量や家父長制の権威の気まぐれによ

って、資源を‘与えられる’ことをいつまでも待ち続ける受動的な存在ではなくなっている（Longwe2002：6-7）。つまり、ここではすでに男女間の力の均衡が保たれ、どちらも相手を支配するものではない社会関係の変革が成された状態になっていることを意味する。それはまた、女性のエンパワーメントが達成されたということの意味する（久保田2005：31-32）。

ここで留意すべき点として、エンパワーメントは「生活や人生のうえで総合的・長期的な取り組みを意味する」ものであり（田中他2002：319）、達成後も持続的あるいは継続的に生涯続く過程であると考えられるため生涯全体を視野に入れている。

ロングウェによるこれらの5つのレベルは直線的に進行するものというよりも、むしろ循環するものであり、円環状またはスパイラル状に関連するものであると説明する（Longwe2002：7、久保田2005：31）。以上のことから、女性の生涯における発達の変化も、必ずしも一連の流れにしたがって進むとは限らず、各要素を順序不同に繰り返し循環して起こるものであると考えられるため、ロングウェのフレームワークに当てはめて女性の生涯発達のプロセスを分析する。また、同フレームワークを用いることは、発達のプロセスを見極め、どの状況下にあるかを見るのに適しているといえる。

4-4. ライフヒストリー・データの活用

第4に、ライフヒストリー・データを素材にして、女性の生涯発達のプロセスを分析する。

先のロングウェのフレームワークは、エンパワーメントのプロセスを見極め、どのレベル（状況）にあるかを見るのに適しているが、他方で各レベルがどのようにして次のレベルにつながるのかが見えにくいといわれる（久保田2005：32）。そこで、ライフヒストリー・データを用いることで、個人によって異なるエンパ

ワーメントのプロセス、つまり、どのようにしてパワーを剥奪されたのかというプロセスを含め、どのようにして、あるいはどのレベルからエンパワーメントが始まるのか、そして次にどのレベルにつながるのかといったそれぞれのレベルの順序・展開を明らかにできるのではないかと考える。また、どのレベルにおいてどの側面が強化されるのか、どの側面の強化が他の側面の強化あるいは弱体化につながるのかという各レベルで生じる諸側面の関係性を明確にできる。さらにどのような要因によって、そのようなプロセスを辿るのかを説明することもできると考えられる。このように、どの側面のエンパワーメントが他のどの側面の強化・弱体化を誘発するのかといった問題に考察の焦点を置くことは、エンパワーメントのダイナミックなプロセス、換言すれば、女性のリアルなパワーの獲得過程を捉えることができるといえる。以上のことから、生涯発達のプロセスにおける諸側面間のダイナミックな現象について描き出すためにライフヒストリーを用いる。

さらに、個人の生活史を素材にして、女性の生涯発達のプロセスを検討することは、次のような示唆を与えるものと思われる。従来、女性のエンパワーメントに関する調査研究は、短期的な調査データや量的調査を中心として、個人の一時的で一面的な変容経験を取り上げて分析されてきた。しかし、それは「生涯の様々な時間・空間」において、一時的な「時間・空間」に限られた部分を見たに過ぎず、表面的な理解に終わる可能性があるといえる。エンパワーメントのプロセスは過去の経験や歴史的出来事や社会的文脈のなかで展開していくものであり、エンパワーメントを分析する際には、そのプロセスを長期的スパンでもって見ていく必要があるとされる。このような背景を踏まえた上で、生涯発達のような変化のプロセスも、子ども期も含めた長期的な時間の広がりの中で捉える

には、個人の人生経験や生活史を素材とした個々の過去の経験や出来事の関係性、個人の置かれている状況など総体的に捉えた分析が必要となる。当事者の生きられた経験の語りを得ることは、女性個人の主観的側面と日々の生活の営みという文脈のなかで発達のプロセスを捉えることができるのではないかと考える。以上のことから、個人のライフヒストリーに即して、女性の生涯発達のプロセスを分析する。

5. おわりに

以上、エンパワーメント概念を援用すれば、従来のように研究対象者の代表性、年齢や発達段階に偏りが見られた女性の生涯発達研究に比べて、女性個々人に見られる発達過程の差異性や多様性の様相を捉えることができ、年齢に基づく発達段階説を超えた社会的・歴史的な文脈のなかで女性の生涯発達過程を包括的に描き出すことができる点で有用である。

最後に全体を踏まえて、ジェンダー視点に立った女性の生涯発達研究は、家父長制的価値や伝統（性役割規範など）により、女性たちが抑圧され周辺に追いやられている状況があることを認識し、女性たちは自らが置かれている被抑圧的現実を自覚し、主体的に様々なパワーを獲得して、自らの価値を形成することで、女性自らが生涯にわたる発達のシステム、つまり既存の価値を変革し、組み替えて、自ら発達過程を形成していくプロセスを捉える必要がある。そのためには、女性のエンパワーメント概念を用いることが不可欠といえる。それは従来の発達理論への再考を迫るものとなり、女性の発達理論やモデルへ新たな一石を投じることとなり得るであろう。

本研究の取り組みが、男女共同参画が謳われ、女性の生き方も更に多様化しようとしているとき、自分の人生を主体的に考え、実践していく手がかりになれば幸いである。

今後の課題として、本研究で提示した枠組みを用いて、これまで看過されてきたとされる、社会から許容されないマイノリティな生き方を選択した女性のライフストーリー事例を分析することで、女性自らが主体となっていかなる力を獲得し、いかなるプロセスを経て生涯における発達過程を形成していくのか、発達を促進させたり阻害させたりする要因はどのようなものがあるのか、その発達の背後にあるメカニズムはどのようなものかを具体的に明らかにしていきたい。また、女性の生涯発達の過程には、常にプラスの発達の局面だけでなく、マイナスの発達の局面も含まれる流動的で断続的な過程を明らかにしていきたい。

引用・参考文献

- 赤尾勝己1998『生涯学習の社会学』玉川大学出版部。
- 2003「生涯発達における意味形成に関する理論的考察—関西大学学生の介護等体験の記録を含めて—」『教育科学セミナー』第34号、39-52頁。
- 2004「生涯発達—物語としての発達という視点」『生涯学習理論を学ぶ人のために』世界思想社、115-139頁。
- 天野正子1990「ライフコースと教育社会学—特集にあたって」『教育社会学研究』第46集、5-15頁。
- エリクソン, E. H. 1977、1980仁科弥生訳『幼児期と社会』1・2みすず書房。
- Elder, G. H., Jr. 1978, "Family History and the Life Course", in Hareven, T. K. (ed.), *Transitions: The Family and the Life Course in Historical Perspective*, Academic Press.
- エルダー, G. H.・ジール, J. Z. 2003正岡寛司・藤見純子訳『ライフコース研究の方法 質的ならびに量的アプローチ』明石書店。
- フリードマン, J. 1995斎藤千宏・雨森孝悦訳『市民・政府・NGO—「力の剥奪」からエンパワーメントへ』新評論。
- ギリガン, C. 1986岩男寿美子監訳『もうひとつの声』川島書店。
- 浜崎隆司・田村隆宏編2011『やさしく学ぶ発達心理学 出逢いと別れの心理学』ナカニシヤ出版。
- ハヴィガースト, R.J. 1997児玉憲典・飯塚裕子訳『ハヴィガーストの発達課題と教育』川島書店。
- 蜂須賀真由美2005「第2章 外部者が定義するエンパワーメントから当事者が定義するエンパワーメントへ—東ティモール・コミュニティ・エンパワーメントプロジェクトを事例として—」佐藤寛編『援助とエンパワーメント—能力開発と社会環境変化の組み合わせ』アジア経済研究所、25-51頁。
- 長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志2007『社会学』有斐閣。
- 原ひろ子1999「規範概念としての『エンパワーメント』と分析概念としての『エンパワーメント』」『女性センターのエンパワーメントと開発—タイ・ネパール調査から』91-108頁。
- 船越かほる2011「青年期後期から成人期前期の親子関係研究の動向」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第17号、27-34頁。
- 石田絢子・神谷治美・島田洋子・吉中康子2005『女性の自立とエンパワーメント 学際的研究をふまえて』ミネルヴァ書房。
- 井上えり子2012「女性のエンパワーメントプロセスと社会運動—ある女性地域活動家のライフストーリーを通して—」『生活学論叢』21号、3-16頁。
- 伊藤るり2002「社会運動と女性のエンパワーメ

- ント——自助組織の可能性を考える——」
 田中由美子・大沢真理・伊藤るり編『開発とジェンダー エンパワーメントの国際協力』国際協力出版会、240-255頁。
- 池松玲子2009「エンパワーメントをめぐる一考察 A Study of Empowerment」『武蔵文化論叢』第9号、1-7頁。
- 岩井八郎2006「ライフコース研究の20年と計量社会学の課題」『理論と方法』22(1)、13-32頁。
- 柏木恵子・高橋恵子編1995『発達心理学とフェミニズム』ミネルヴァ書房。
- 久木田純・渡辺文夫編1998「エンパワーメント 人間尊重社会の新しいパラダイム」『現代のエスプリ』11、至文堂。
- 久保田真弓2005「エンパワーメントに見るジェンダー平等と公正——対話の実現に向けて——」『国立女性教育会館研究紀要』第9号、27-38頁。
- コールバーグ, L. 1987永野重史監訳『道徳性の形成 認知発達のアプローチ』新曜社。
- レヴィンソン, D. J. 1992南博訳『ライフサイクルの心理学 上・下』講談社学術文庫。
- Longwe, Sara Hlupekile. 2002, *Addressing Rural Gender Issues : A Framework for Leadership and Mobilisation*, Paper presented at the III World Congress for Rural Women, Madrid, October, pp 1-13.
- 松本大2005「エンパワーメント・ポリティックスと女性」高橋満・槇石多希子編『ジェンダーと成人教育』創風社、87-108頁。
- 村田孝次1989『生涯発達心理学の課題』培風館。
- 森岡清美1986『新教育社会学辞典』東洋館出版社、837頁。
- 1996「ライフコースの視点」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『ライフコースの社会学』岩波書店。
- 妙木忍2009『女性同士の争いはなぜ起こるのか 主婦論争の誕生と終焉』青土社。
- 目黒依子1998「ジェンダー問題とエンパワーメント」久木田純・渡辺文夫編『現代のエスプリ』11、至文堂、35-43頁。
- モーザ, C. 1996久保田賢一・久保田真弓訳『ジェンダー・開発・NGO——私たち自身のエンパワーメント』新評論。
- 中西祐子・堀健志1997『『ジェンダーと教育』研究の動向と課題——教育社会学・ジェンダー・フェミニズム——』『教育社会学研究』第61集、77-100頁。
- 中村和彦2004「エンパワメントの概念およびエンパワメント・ファシリテーションの検討」『人間関係研究』3、1-22頁。
- 難波淳子2000「中年期の日本人女性の自己の発達に関する一考察——語られたライフヒストリーの分析から——」『社会心理学研究』第15巻第3号、164-177頁。
- 岡本祐子1999『女性の生涯発達とアイデンティティ——個としての発達・かかわりの中での成熟——』北大路書房。
- 岡本祐子・松下美知子編2002『新 女性のためのライフサイクル心理学』福村出版。
- 大久保孝治1990「ライフコース分析の基礎概念」『教育社会学研究』第46集、53-70頁。
- 佐藤寛編2005a『援助とエンパワーメント——能力開発と社会環境変化の組み合わせ——』アジア経済研究所。
- 2005b「特集エンパワーメント再考 特集にあたって——エンパワーメントをめぐる論点」『アジア研ワールド・トレンド』第120号、日本貿易振興機構アジア経済研究所、2-3頁。
- 嶋崎尚子2008『ライフコースの社会学』学文社。
- 鈴木奈穂美2010「エンパワーメント概念の潮流と戦略的エンパワーメント政策の弊害」『専修大学人文科学研究月報』246、専修大学人文科学研究所、1-13頁。

竹家一美2006「女性の生涯発達研究に関する一
考察：アメリカにおける研究の概観を踏ま
えて」『教育方法の探求』 9、73-80頁。
橘木俊詔2008『男女格差』 東洋経済新報社。
田中由美子・大沢真理・伊藤るり編2002『開発
とジェンダー エンパワーメントの国際協

力』 国際協力出版会。
宇都宮真輝2008「成人女性の生涯発達理論に関
する省察——30代シングル女性の課題を中
心に——」『吉備国際大学社会学部研究紀
要』 第18号、47-58頁。